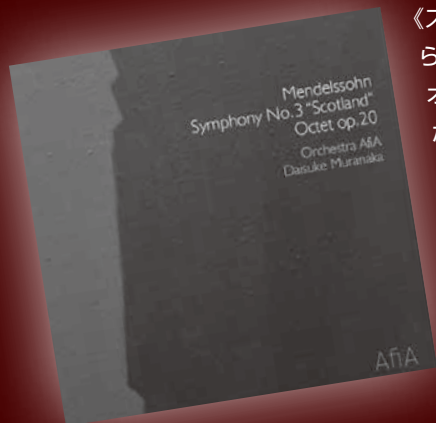


村中大祐指揮 Orchestra AfiA の第一弾 CD  
「メンデルスゾーン：交響曲第3番《スコットランド》」が、  
レコード芸術 2015年10月号の推薦CDに選ばれました！



《スコッチ》の序奏、遅めのテンポで今どき珍しいくらいヴィブラートをかけ、心の歌を奏でる。ヴァイオリンが入るとコンマスではなくコンミスではないかと思わせるデリケートなニュアンスと、優美な音色が氾濫する。全体に隙間のないハーモニーの厚みがすばらしい。主部を反復しないのも前記ヴィブラートの多用とともに村中大祐の才能を感じさせる。最近流行のドラマの強調はないが、生々しい部分は十分に鳴らし、それが緻密さと一体化して音楽を堪能させるのだ。(中略) フィナーレ

は出のヴァイオリンの冴え切ったテーマから一気に惹かれる。リズムが生き、指揮者の意志が伝わってくる。この指揮者はいつも自分の音楽をやっている。

テーマが盛り上がり、第2主題が出るまでの前進力と緊張感にあふれたひびきはエネルギーのかたまりであり、すべての部分がきびきびと運ばれる。八重奏曲について書き始めると舌足らずになってしまう。やはり名演である。

宇野功芳氏  
(2015年レコード芸術10月号推薦盤)

宇野功芳氏

(2015年レコード芸術10月号推薦盤)

本日会場にて無料冊子と共に販売中！

### Nature and Music

「自然と音楽」演奏会シリーズは、2011年の東日本大震災後に生まれたプロジェクトである。

自然の猛威を感じながらも、自然との共生を続けていくために、われわれ音楽家がどのようなメッセージを発信したらよいかを考え、募金活動という形ではなく、実際に湘南国際村で行われている「植樹」や、東北で防波林を作るプロジェクトなどに演奏会から得られた利益を還元していくことを考えた。

音楽の成立過程のなかで、音楽が「自然」を表現し始めたことから、「音のなかに自然を感じ、自然と向き合う」ことを目的に、このテーマが作られた。



15th  
October  
2016  
KioiHall

“DIE GEBURT  
DER TRAGÖDIE”  
「Reの悲劇」

CONDUCTOR: DAISUKE MURANAKA

PIANO: IRINA MEJOUJEVA

ORCHESTRA AFIA

村中大祐指揮 Orchestra AfiA

「自然と音楽」演奏会シリーズ Vol.11

“Die Geburt der Tragödie”

「Reの悲劇」

指揮：村中大祐 ピアノ：イリーナ・メジューエワ

2016年10月15日(土) 18:00 開演

東京赤坂・紀尾井ホール

主催：AfiA Office 後援：公益財団法人 ロームミュージックファンデーション

# Speisekarte

お品書き

Aperitif

食前酒

(Tasca d'Almerita Vino del Conte 2016)  
(故木之下見氏に捧ぐ。タスカ「伯爵のワイン」2016)

Brahms Tragische Overtüre d-moll Op.80

ブラームス：「悲劇的序曲」二短調作品 80

Hauptspeise(Fleisch)

肉料理

Brahms Klavierkonzert Nr.1 d-moll Op.15

ブラームス：ピアノ協奏曲第 1 番二短調作品 15

第一楽章 Maestoso (堂々として)  
第二楽章 Adagio (ゆっくり)  
第三楽章 Rondo Allegro ma non troppo  
(ロンド 速すぎないアレグロで)

\*\*\*\*\*Pause\*\*\*\*\*

Hauptspeise(Fisch)

魚料理

Schumann Symphonie Nr.4 d-moll Op.120

シューマン：交響曲第 4 番二短調作品 120 (最終稿)

第一楽章 Ziehlich Langsam (かなりゆっくりと) ~ Lebhaft (生き生きと)  
第二楽章 Romanze Ziehlich Langsam (ロマンツェかなりゆっくりと)  
第三楽章 Scherzo Lebhaft (スケルツォ 生き生きと)  
第四楽章 Langsam ~ Lebhaft (ゆっくりと~生き生きと)

Leitung Daisuke Muranaka

指揮：村中大祐

Klavier Irina Mejoueva

ピアノ：イリーナ・メジューエフ

Es spielen

管弦楽：Orchestra AfiA

## 内気な男たちの Inside Out

アーティストとは総じて皆「内気」なものであるが、そんな内気は社会の荒波の中では、残念ながらマイナスとされてしまうことが多い。だが真のアーティストには大抵「逆転の人生」が待っている。彼らはそういった自分の「弱み」を Inside Out (ひっくり返し) して、遂には世間の評価を勝ち取っていく。

今回取り上げたシューマンとブラームスの作品は、その「内気」さから初演時にいずれも成功しなかった作品ばかりであるが、作曲家として彼らが自分自身を偽りなく表現した、いずれも名曲中の名曲。彼らの代表作ばかりである。

## 秘密結社「ダヴィッド同盟」とブラームスの登場

父親が本屋や出版社を経営し、翻訳に長け小説も書いたためか、シューマンは若い頃から文学に造詣が深く、自ら文章を書いて音楽雑誌 Neue Zeitschrift für Musik「音楽新報」を出版する。そして当時共に楽しい時間を過ごした仲間たちとの異業種交流から、シューマンは「David Bündler ダヴィッド同盟」という想像上の秘密結社を創り出す。この結社に所属する架空の登場人物として、Florestan (フロレスタン) と Eusebius (オイゼビウス) という、一方は情熱的で外交的、そしてもう一方は内気な性格の二人を登場させ、そのペンネームを使いながら、シューマンは「音楽新報」の中で新しい音楽評論の形を目指したのである。

この「ダヴィッド同盟」には他にも、メンデルスゾーンは Meritis (メリティス)、妻のクララは Chiara (キアラ)、クララの父ヴィークは Meister Raro (マイスター・ラーロ) として登場し、更にはベートーヴェンやシューベルト、モーツァルトやベルリオーズといった錚々たる顔ぶれが加わって、シューマンは自身を法律家 Julius (ユリウス) の名で登場させている。

1853年ヴァイオリニストのヨーゼフ・ヨアヒムから若き天才ブラームスを紹介されると、新たに「Neue Bahnen 新たな道」というテーマで「音楽新報」に寄稿してその才能を絶賛し、新たな未来を見つけた興奮を世に伝えようとした。だがそんな幸せも束の間、シューマンは翌 1854 年になると、幻聴や幻覚からライン川に身を投げて自殺未遂を起こし、1856 年には他界してしまう。ブラームスは最大の理解者を早期に失うこととなるのである。

## 一方は笑い、もう一方は泣く

ところで何故わたしが初めにシューマンの架空の秘密結社「ダヴィッド同盟」を持ち出したかということ、それは **ブラームス：悲劇的序曲二短調作品 81** を読み解くためである。(Allegro ma non troppo ~ Molto più moderato ~ Tempo primo アレグロ・マ・ノントロppo〜モルト・ピウ・モデラート〜テンポプリモ)

この作品が生まれたのはブラームスが47歳（1880年）の夏、バート・イシュルでのことだが、この時期ブラームスには2つの重要なイベントが待っていた。ひとつはブレスラウ大学からの名誉博士号授与であり、もうひとつは亡くなったシューマンの胸像設立式に参列することだった。そしてこの時期に「大学祝典序曲」と「悲劇的序曲」の名曲2曲が平行して作曲されたわけだが、この2曲についてブラームス自身が「一方は笑い、もう一方は涙する」と語っている事実は、先に挙げた、「ダヴィッド同盟」におけるフロレスタンとオイゼビウスの対比を思い起こさせる。シューマンという師を失ったブラームスの中に、その記念碑設立に立ち会った事実が影響したのでは、と思わせるエピソードである。

### 森羅万象、その理を表す

この「悲劇的序曲」という作品は、ブラームスの友人でウィーンの劇場主フランツ・フォン・ディンゲルシュテットのすすめで、ゲーテの代表作「ファウスト」の劇音楽として書かれた、という説があって、著名な音楽学者のアルトマンもこれを是認している。ブラームス自身はそもそも「悲劇」のストーリーではなく、単なる「ドラマティック」な序曲を作るつもりだったが、「一方は笑い、もう一方は泣く」という例えからも分かるように、最終的にはブラームス自身が「悲劇的」と命名している。

「音と自然の佇い」を感じさせるこの作品。「自分を困む世界」へと向けられた視点から見えてくるのは、ただひたすら森羅万象とその理を見据えて表現しようとしたブラームスの愚直な姿である。聴きどころは、殆ど大オーケストラでしか演奏されないこの「劇的」序曲を、小編成のオーケストラのニュアンスによって、どこまでその真髄に迫れるか。興味深く聴いてみて欲しい。

### クララを絶望から救うコンチェルト

**ピアノ協奏曲第1番二短調作品15**は、ブラームスがシューマン夫妻と出会った22歳（1853年）の時に書き始められ、4年後の1856年、シューマンの死後3か月経ってようやく完成された、ブラームス生涯2番目のオーケストラ作品である。初演はブラームス自身が演奏するも必要な評価を得られず、3度目の公開演奏でやっと聴衆から認められ、その苦難の道のりは計り知れないものであったが、これを支えたのは他でもない、亡きシューマンの妻クララであった。

クララはその日記に、1856年10月1日「ヨハンネスが素晴らしいピアノ協奏曲の第一楽章を書き上げた。私は彼の作り上げたこの作品の偉大なコンセプトとメロディーのやさしさに強く心を動かされた。」と書き残している。10月18日には「ヨハンネスが彼の協奏曲を書き上げた！私たちは2台のピアノでこの協奏曲を何度も演奏したのです。」と記している。

その後クララ自身も何度かこの作品を演奏することで聴衆の理解を得ようと試みているが、残念ながらうまくいかず、ワーグナーに自身の妻コジマを奪われた名指揮者、ハンス・フォン・ビューローの登場を待って、初めてこの協奏曲は日の目を見ることとなる。

### Dies Bildnis ist bezaubernd schön... 「なんと美しい絵姿よ...」

そもそも2台のピアノのためのソナタだったこの曲は、次に交響曲に変更され、最終的にはピアノ協奏曲第一番となったわけだが、その室内楽的な音の扱いが全楽章を通じてはっきりと感じ取れる作品でもある。**第一楽章 (Maestoso マエストーゾ)**は25分を超える大作だが、交響曲のそれとはまるで違う音のパレット。二短調とは言いながら変ロ長調で始まり、調性は楽章を通じて極めて移ろいやすく、その繊細な色使いは、表現者にとって越えなければならぬ大きな関門である。

クララに宛てて「君の優しい表情の肖像画を描くアダージョとなるでしょう。」とブラームス自身が書き記した**第二楽章 (Adagio アダージョ)**。その最初の5小節には「神の御名に集う者たちが祝福されんことを Benedictus qui venit in nomine domini」と書き記しているが、この祈りと慈愛に満ちた音の絵は、ブラームス本来のやさしさを表現する傑作と言える。

**第三楽章 (Rondo ロンド)**はベートーヴェンのピアノ協奏曲第3番の影響を思わせる始まり方だが、迸る情熱、そしてオーケストラとピアノソノリの掛け合いに是非とも注目して頂きたい。

### 天国からの嫉妬か？二人の破局を呼ぶ交響曲の良

クララとブラームスの間にあった蜜月関係を壊しかねない事態が、亡夫の交響曲をめぐる起こるなどと、一体誰が想像したろう。入水自殺を図ったシューマンが、「あの世でもクララ、君と結ばれたい」と願ってライン川に結婚指輪を投げ捨てたというのは、極めて有名な逸話だが、そんなシューマンがクララの誕生日にプレゼントとして贈ったこの交響曲が、もの見事にクララとブラームスとの関係に亀裂を生じさせたとすれば、あまりにも出来過ぎた話ではないか。

シューマンがヨーロッパ随一の女流ピアニスト、クララ・ヴィークと結婚して120曲以上もの歌曲を生み出した「歌の年」の翌年1841年は、交響曲が3曲も生み出されて「交響曲の年」とされている。有名な交響曲第1番「春」の大成功に続いてシューマンが書き終えたはずの、本来第2番と銘打たなければならない作品が、今夜お聴き頂く交響曲第4番である。

何故第4番となったのかについては、誰も不思議に思うところである。だがこの交響曲の初演は、残念ながら交響曲第1番ほどの成功を取めることができず出版を断られてしまったため、その後長い間シューマンによって部屋の片隅に放置されてしまう。その期間はなん

と10年間。10年後に手直しされ出版にこぎつけた頃には、もう既に第2番、第3番が出版されていたため、本来交響曲第2番となるはずだったこの作品は、**交響曲第4番二短調作品120**として出版されることになった。

## 一楽章の交響曲

この曲の初稿が初演されたライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団のプログラムを見て驚くのは、第一部と第二部の最初にシューマンの書き上げたばかりの新作交響曲が一曲ずつ置かれていることだ。誰も聴いたことがない交響曲の初演を2つするなら、観客の評判は芳しくないことは想像に難くない。同年初演された第一番「春」が大成功した理由の一つに、メンデルスゾーンの指揮者としての手腕が挙げられるが、その彼がベルリンに居て指揮できなかったことも、シューマンにとっては大きな痛手だった。また、この音楽会自体はクララのために催されたものだったが、そこに当時ピアニストとして神のごとく崇められていたフランツ・リストが友情出演し、クララと共に登場して演奏したとなれば、聴衆にとってはもはや、シューマンの交響曲などそっちのけで、リストやクララのピアノ演奏を何より優先して聴きたい、ということになるわけだ。クララ自身も「2つの交響曲の初演は多すぎた」と回想しているが、シューマンの意図した「全ての楽章をつなげる」交響曲の書き方は、当時の聴衆が持っていた常識を遥かに超えたものだったようで、まるで長い第1楽章を思わせ失敗をした、というのがどうやら真実のようである。

## 交響曲の復活

それから10年後の1851年、デュッセルドルフ市音楽総監督として交響曲第3番「ライン」を初演し大成功を収めたシューマンは、同い年の作曲家で私たち日本人にもお馴染みのノルベルト・ブルクミュラー（1810~1836年）が残した未完の第2交響曲の補筆を頼まれるわけだが、この仕事を途中で投げ出すとシューマンは、何とその昔に出版を諦めたはずの自身の交響曲の補筆を始めるのだった。こうして翌1852年12月に完成すると、交響曲第4番の第二稿は1853年3月にシューマン自身の指揮で初演され、それから2か月後の「ライン音楽祭」公演では、まさに大勝利とも言える瞬間を味わうことになる。

## 今は亡き夫に対する敬意

この第二稿初演の年にシューマンと出会い、「新たなる道」として世間に紹介された若きブラームスは、後年この交響曲の古い初稿をクララから贈られると、その初稿を最終稿よりも優れたものとして評価し始める。1888年クララに宛てた手紙にブラームスは、「この初稿を出版しようと思います。この作品のスコアを見たなら、その誰もが最終稿で改善された

などとは思わないことでしょう。最終稿では初稿にあったような美しさや軽さ、明快さが失われているのです。」と書き記している。これに対しクララが最終稿を支持したのにも関わらず、1891年ブラームスは友人に宛てて、この初稿を出版するよう依頼する。クララはこの初稿が出版されるとは知らずにいたため、ブラームスとの仲に亀裂が生じることになるのである。「ブラームスがこの初稿を大切に考えていることは知っているが、この初稿が出版されあちらこちらで演奏されることは、正しいことではないと考える」とクララは語り、「夫に対する敬意に欠く行為であり、このような結果になるとは思いもしなかった。」とかなり手厳しく批判している。

この交響曲第4番は4つの楽章に分かれている。

第一楽章：Ziehlich Langsam（かなりゆっくりと）～Lebhaft（生き生きと）

第二楽章：Romanze Ziehlich Langsam（ロマンツェ かなりゆっくりと）

第三楽章：Scherzo Lebhaft（スケルツォ 生き生きと）

第四楽章：Langsam～Lebhaft（ゆっくりと～生き生きと）

ブラームスに見られた「森羅万象」を表現しようとする「外を見つめる」視点は、シューマン作品では人間の内面を表現しようとする「内側を見つめる」視点に変わること注目してほしい。

特筆すべきは第二楽章のロマンツェで現れる、まるでヨーロッパ中世から飛び出してきたかのような吟遊詩人の歌である。オーボエとチェロの描き出すものがたりの世界から曲想がソロ・ヴァイオリンに転じた瞬間、哀しみは幸せの記憶へと一変する。

また第三楽章で繰り広げられる人間の労苦は、第四楽章で開放され、幸福な結末へと昇華される。そんな人間ドラマを「悲劇の誕生」と掛けてみたが、今夜お聴き頂いたブラームスとシューマンの音のちからから生まれた世界観は、いずれも希望に満ちた世界への幕開けとなったのではないだろうか。

貴方はどうお感じになったでしょうか？

指揮者  
村中大祐  
Daisuke MURANAKA



©Yutaka NAKAMURA

東京外国語大学ドイツ語学科を卒業後、ウィーン国立音楽大学で指揮を学び、トーティ・ダル・モンテ国際オペラコンクール指揮部門「ボッテガ」と第1回マリオ・グゼッラ国際指揮者コンクールで、いずれも第1位を獲得。フルトヴェングラーの高弟で20世紀最高のモーツァルト指揮者、ペーター・マークの薫陶を受け、また今年他界したクラウディオ・アッパードの下でも研鑽を積む。

1995年、急病の師ペーター・マークに代わって、公演初日2時間前に急遽抜擢されて指揮したモーツァルトの歌劇「魔笛」は、イタリア内外での話題を呼び鮮烈なデビューとなった。

これまでにヴェネチア・フェニーチェ歌劇場、パレルモ・テアトロ・マッシモ、新国立劇場（日本）、スイス・ザンクトガレン・オペラ・フェスティバルや英国グラインドボーンオペラ（アジア人初）などに登場し、ボーザル・ホール（ブリュッセル）、カドガン・ホール（ロンドン）、ドヴォルザーク・ホール（チェコ）、サーラ・ヴェルディ（ミラノ）等の演奏会に登場。オペラとコンサートのい

ずれでも世界各地で絶賛を博している。

国内では、これまでNHK交響楽団をはじめとする国内主要オーケストラに招かれ、新国立劇場で指揮したモーツァルトの歌劇「魔笛」では第11回出光音楽賞（2001年）を受賞。これまでに第19回ヨコハマ遊大賞受賞（2007年）。また横浜オペラ未来プロジェクト「秘密の結婚」が三菱東京UFJ芸術文化財団音楽賞（2009年）を受賞している。

2006年～2009年、横浜開港150周年記念事業「横浜オペラ未来プロジェクト」の企画・立案を行い、同プロジェクトを芸術監督として成功に導いた。また2006年、Orchestra AfiA（アフィア）の前身となる横浜OMPオーケストラを設立し、内外のアーティストの人材流通拠点を横浜に創出したことは、日本国内のみならず海外でも大きな反響を呼んだ。

2013年にはOrchestra AfiA（アフィア）を創設。『自然と音楽』演奏会シリーズとして、東京の鎮守の森・浜離宮朝日ホールでの一連のコンサートを開始。第二回「満月に寄す」公演では、鎌倉鶴岡八幡宮の神嘗祭に合わせ、同社、若宮にて奉納演奏を行っている。

2013年11月からは英国ロンドン・カドガンホールにてイギリス室内管弦楽団（ECO）との『自然と音楽』シリーズを開始。2014年4月にはベートーヴェン「田園」などを熱演して、満場の聴衆からスタンディングオベーションで迎えられた。また、2015年に同地で行ったメンデルスゾーンの「スコットランド」の演奏は、現地の音楽評論家から絶賛されている。更に同年、英国チャールズ皇太子御臨席演奏会で演奏したベートーヴェンやシューベルトの解釈が英国人に絶賛され、イギリス室内管弦楽団より「国際招聘指揮者」というタイトルが付与されている。

国内では2015年12月に紀尾井ホールでOrchestra AfiAと演奏したマーラー「大地の歌」コレクター版の日本初演が内外の注目を集め、その模様はBSフジの「夢の食卓」で「指揮者村中大祐の世界」として放映されている。

2015年には若林工房から「AfiA レーベル」CD第一弾としてメンデルスゾーンのスコットランド交響曲と弦楽八重奏曲のCDが発売され、新聞紙上ならびに「レコード芸術」などで絶賛され、2016年にはCD第二弾が発売予定である。2016年には村中大祐がOrchestra AfiA（アフィア）やイギリス室内管弦楽団と共に推進する「自然と音楽 演奏会」のコンセプトが、世界2000を超える音楽団体が加盟する「クラシカル・ネクスト（Classcal:NEXT）」のイノベーション・アワードにノミネートされている。

メディアでは、テレビ朝日系列「題名のない音楽会」、日本テレビ系列「深夜のコンサート」、BSフジ「夢の食卓」やNHKFM、NHKBS、NHK教育テレビ、TOKYO FM、FMヨコハマ、TVKなどに多数出演。

オフィシャルWebサイト：<http://clubmuran.info>

## ピアノ

## Irina Mejoueva

イリーナ・メジュエワ



©Isamu NAKAMURA

ロシアのゴリキー（現・ニジニー・ノヴゴロド）生まれ。5歳よりピアノを始め、モスクワのグネーシン特別音楽学校とグネーシン音楽大学（現・ロシア音楽アカデミー）でウラジーミル・トロップ教授に師事。1992年ロッテルダム（オランダ）で開催された第4回エドゥアルド・フリプセ国際コンクールでの優勝をきっかけに、オランダ、ドイツ、フランスなどで公演を行う。1997年からは日本を本拠地として活動を始め、東京文化会館小ホール、紀尾井ホール、トッパンホール、浜離宮朝日ホール、ハクジュホールなどでリサイタルを開催。

バロック、古典派から近・現代にいたる作品まで幅広いレパートリーを手がけるが、近年再評価の進むロシアの作曲家ニコライ・メトネルの作品紹介にも力を入れており、2001年にはメトネル没後50年を記念したシリーズ「忘れられた調べ」（東京、ムジカーサ）でその主要作品を4夜にわたって取り上げ注目を集めた。

2002年、スタインウェイ・ジャパン株式会社によるコンサートツアーを行う。2003年、サンクトペテルブルク放送交響楽団の日本ツアーにソリストとして登場したほか、2004年および2006年にカルテット・イタリアーノと室内楽を共演。2005～2006年のシーズンにはザ・シンフォニーホール（大阪）で4回にわたるリサイタル・シリーズを開催、2006年からは毎年京都でリサイタルを行うなど、精力的な演奏活動を展開している。

これまでにロッテルダム・フィルハーモニー管弦楽団、プラハ交響楽団、ゴリキー・フィルハーモニー管弦楽団、ロシア・シンフォニーオーケストラ、オーケストラ・アフィア、日本フィルハーモニー交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団、東京都交響楽団、読売日本交響楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、大阪センチュリー交響楽団、大阪交響楽団、京都市交響楽団、兵庫芸術文化センター管弦楽団、テレマン室内管弦楽団、九州交響楽団、山形交響楽団、高雄市交響楽団（台湾）などと共演。

CD録音にも積極的で、デンオン（コロムビア）や若林工房などから多数のアルバムをリリース。

2007年から2009年にかけて録音した「ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ全集」(5巻、10CD)は、全巻が「レコード芸術特選盤」に選ばれるなど高い評価を獲得した。2010年リリースの「ショパン:ノクターン全集」は同年度レコードアカデミー賞(器楽曲部門)に輝く。

2006年度青山音楽賞受賞。

2014年度(第27回)ミュージック・ペンクラブ音楽賞(クラシック部門、独奏・独唱部門賞)を受賞。

コンサートマスター  
渡辺美穂  
Miho WATANABE



1983年、名古屋生まれ。3歳よりヴァイオリンを始め、林茂子、故・久保田良作、故・ゲルハルト=ボッセ、ジェラルド=プーレ、澤和樹の各氏に師事する。第53回全日本学生音楽コンクール全国大会第1位。

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校から東京藝術大学へと進み、2005年卒業。卒業時にアカンサス音楽賞を受賞し、同大学院へ進学。2006年、東京フィルハーモニー交響楽団へ入団し、2012年

7月までセカンドヴァイオリン フォアシューパーラーを務めた。

同年9月、大阪フィルハーモニー交響楽団コンサートマスターに就任し2014年まで務めた。これまでに名古屋フィルハーモニー交響楽団、セントラル愛知交響楽団、藝大フィルハーモニア等とソリストとして共演。現在は東京フィル他各オーケストラのゲストコンサートマスターとしての活動のほか、ソロ、室内楽にも取り組んでいる。

オーケストラ・アフィア奏者  
第一ヴァイオリン

吉成とも子 Tomoko YOSHINARI

神奈川県出身。9歳よりヴァイオリンを始める。湘南高校卒業後、東京音楽大学に給費特待生として入学。東京音楽大学研究科を経て東京芸術大学大学院修了。ヤマハ音楽振興会より国内奨学生として選ばれる。現在フリーの演奏家として活動中。

芝田愛子 Aiko SHIBATA

東京藝術大学、ウィーン国立音楽大学卒業。チュールリッヒ歌劇場管弦楽団、ウィーン放送交響楽団などで契約団員として活動。現在、フリーの演奏家として活動中。

濱田彰子 Shoko HAMADA

洗足学園音楽大学、同大学院修士課程器楽専攻を首席で卒業。洗足学園ニューフィルハーモニック管弦楽団団員、静岡県立沼津西高等学校芸術科非常勤講師。

玄津 舞 Mai GENTSU

武蔵野音楽大学首席卒業。読売新聞演奏会出演。京都国際音楽学生フェスティバル参加。これまでに菅原英洋、グレゴリー・フェイギン、三浦彰宏の各氏に師事。

舘村 結 Yui TATEMURA

国立音楽大学卒業。国立音楽大学アドヴァンスト管弦楽コース修了。第八回日本演奏家コンクール弦楽器部門入選。徳永二男、三浦章宏、荒井雅至の各氏に師事。

片山奈都実 Natsumi KATAYAMA

4歳よりヴァイオリンを始め国立音楽大学卒業。三浦章広、パヴェル・ヴェルニコフ各氏に師事。イタリアのグッピオとウィーンにてマスタークラス受講。

第二ヴァイオリン

重岡菜穂子 Nahoko SHIGEOKA (首席)

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校、東京藝術大学、同大学院修了。大学卒業時に、同声会賞受賞。文化庁在外研修員として、ベルギーに留学しブリュッセル王立音楽院に入学。ディプロマを取得し、最高栄誉賞付きで、満場一致の満点で首席卒業。

竹政大介 Daisuke TAKEMASA

愛媛県出身。洗足学園音楽大学音楽学部卒業。同大学大学院修了。全四国音楽コンクールにおいて、第32回最優秀賞受賞。第33回、第35回優秀賞受賞。

早川元菜 Haruna HAYAKAWA

国立音大附属音楽高校、国立音楽大学を卒業。同校卒業演奏会及び読売新聞社主催新人演奏会に出演。現在ソロ・室内楽、オーケストラを中心に演奏活動を行っている。

大藤康祐 Kosuke DAITO

横浜生まれ。昭和音楽大学演奏家コース卒業。専攻科終了後、同大学研究員を務める。ザルツブルグ・モーツァルテウム音楽院で1・オストラフに学ぶ。清水高師、瀬川光子、川上久雄の諸氏に師事。

瀬堀玲実 Remi SEBORI

桐朋女子高等学校音楽科、桐朋学園大学を経て研究科修了。サイトウキネン室内楽勉強会、オペラプロジェクト参加。演奏家として活躍中。東工大管弦楽団の指導にあたる。

志摩かなえ Kanae SHIMA

東京藝術大学音楽学部卒業。ヴァイカースハイム、マンハイムにて講習会に参加。現在オーケストラやミュージカル等で演奏している。横浜パロック室内合奏団団員。

鈴木奈津子 Natsuko SUZUKI

愛知県に生まれ5歳よりバイオリンを始める。東京音楽大学音楽学部器楽専攻卒業。第12回「万里の長城杯」国際音楽コンクール第2位、入賞披露演奏会に出演。洗足学園ニューフィルハーモニック管弦楽団所属。

## ヴィオラ

## 村松 龍 Ryo MURAMATSU (首席)

東京音楽大学付属高等学校を経て同大学卒業。第49回全日本学生音楽コンクール東京大会小学生の部第2位。読売新人演奏会出演。沖縄国際音楽祭、若い人のためのサイトウ・キネン室内楽勉強会、小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクトなどに参加。これまでにヴァイオリンを井上將興、清水高師、久保陽子、ヴィオラを店村真積、河合訓子の各氏に師事。現在NHK交響楽団ヴィオラ奏者。室内楽でも活躍している。

## 高橋 奨 Susumu TAKAHASHI

東京音楽大学卒業、洗足学園音楽大学大学院修了。ヴィオラを宛東俊之、百武由紀、岡田伸夫、井野邊大輔の各氏に師事。洗足学園ニューフィルハーモニック管弦楽団ヴィオラ奏者。

## 森山千春 Chiharu MORIYAMA

東海大学教養学部芸術学科音楽学課程卒業。桐朋オーケストラ・アカデミー修了。現在、フリーのヴィオラ奏者として演奏活動を行う。アンサンブル・ロカ、東京シンフォニア各メンバー。

## チェロ

## 上森祥平 Shohei UWAMORI (首席)

日本音楽コンクール第1位入賞。ベルリン芸術大学卒業。ドイツ国家演奏家資格を取得。2008年より毎年バッハ無伴奏チェロ組曲全曲演奏会を開催。京都市芸術文化特別奨励者、及び京都府文化賞奨励賞受賞。東京芸術大学非常勤講師。

## 山本直輝 Naoki YAMAMOTO

東京芸術大学大学院修士課程修了。大学内において安宅賞、アカンサス音楽賞など受賞。フリー奏者として、ソロ、室内楽、オーケストラへの客演首席など幅広く活動中。チェロを松波恵子、山崎伸子、藤森亮一の各氏に師事。

## 七澤達哉 Tatsuya NANASAWA

東京芸術大学音楽学部卒業。第12回大阪国際音楽コンクール アンサンブル部門第1位。神戸市長賞受賞。カルテットN等のヴィオラ奏者として、室内楽のコンサートで活躍中。小澤国際室内楽アカデミー奥志賀、SKF等に参加。これまでにヴィオラを川本嘉子氏、川崎和憲氏、市坪俊彦氏に師事。

## 鈴木大樹 Taiki SUZUMURA

3歳よりヴァイオリンを始め18歳でヴィオラに転向。第9回東京音楽コンクール第3位。これまでに宮崎国際音楽祭、プロジェクトQ等のコンサートに出演。岡田伸夫氏に師事。

## 奥泉貴圭 Takayoshi OKUIZUMI

東京芸術大学附属音楽高等学校を卒業後、ドイツ・トロツィンゲン音楽大学を経て、2007年より2年間バイエルン国立歌劇場の契約団員として研鑽を積む。2006年度文化庁在外研修員。上野学園非常勤講師。

## 飯島哲蔵 Tetsuzo IJIMA

4歳よりチェロを始める。これまでにチェロを中島克久、前田善彦、河野文昭、上森祥平、山崎伸子の各氏に師事。現在、東京芸術大学大学院在学中。

## コントラバス

## 松井理史 Yoshifumi MATSUI (首席)

千葉県出身。9歳よりコントラバスを始める。桐朋学園大学卒業。同研究科、桐朋オーケストラアカデミーを修了。特定非営利活動ハマのJACKメンバー。永島義男、西田直文、白土文雄の各氏に師事。

## 菅野紗綾 Saya SUGANO

東京芸術大学卒業。石川滋、永島義男、山本修の各氏に師事。

## 市川哲郎 Tetsuro ICHIKAWA

桐朋学園音楽学部卒業。同大学研究科終了。西田直文氏に師事。群馬交響楽団首席コントラバス奏者及び、室内オーケストラARCUSメンバー。

## フルート

## 宮崎由美香 Yumika MIYAZAKI (首席)

東京芸術大学首席卒業。同大学大学院修了。日本木管コンクール第2位。フルートコンベンションコンクール第2位。管打楽器コンクール第2位。NHK交響楽団他、多数の客演首席を務める。尚美ミュージックカレッジ非常勤講師。

## 中川 愛 Ai NAKAGAWA

東京音楽大学卒業、同大学研究生修了。2003年より東京交響楽団、2013年より東京都交響楽団フルート奏者。

## ピッコロ

## 柴田 勲 Isao SHIBATA

東京芸術大学、ケルン音楽大学卒業。日本フィルハーモニー交響楽団フルート奏者。

## オーボエ

## 鈴木純子 Junko SUZUKI (首席)

東京芸術大学卒業。1997年～1998年にかけてアフィニス文化財団海外研修員としてフランスに留学。現在、神奈川フィルハーモニー管弦楽団首席奏者。

## 多田敦美 Atsumi TADA

愛知県立芸術大学卒業。東京芸術大学別科卒業。東京芸術大学大学院音楽研究科修了。日演連推薦新人演奏会にて札幌交響楽団と共演。現在、フリー奏者として活動。寺岡稔、小畑善昭、オットー・ヴィンター、池田昭子各氏に師事。

## クラリネット

## 濱崎由紀 Yuki HAMASAKI

東京藝術大学を首席で卒業。同大学院修了。在学中、安宅賞、アカンサス音楽賞を受賞。水戸室内管弦楽団、宮崎国際音楽祭、霧島国際音楽祭、サイトウキネンフェスティバル等に出演。2002年第71回日本音楽コンクール・クラリネット部門第3位。現在、藝大フィルハーモニア、クラリネット奏者。上野学園非常勤講師。

## 櫻田はるか Haruka SAKURADA

神奈川県出身。国立音楽大学卒業。ヤマハ新人演奏会出演。桐朋オーケストラアカデミー研修課程及び研究科修了後、渡仏。ヴェルサイユ地方国立音楽院及びパリ12区立ポール・デュカ音楽院修了。第3回東京音楽コンクール入選、第18回国際音楽祭ヤングプラハに出演。

## ファゴット

## 武井俊樹 Toshiaki TAKEI (首席)

桐朋学園大学音楽学部卒業。卒業演奏会および読売新人演奏会に出演。1991年から1997年まで仙台フィルハーモニー管弦楽団に在籍。外山雄三氏(音楽監督/当時)他の指揮により定期演奏会等でソリストとしても出演。第9回日本管打楽器コンクール・ファゴット部門第2位受賞。読売日本交響楽団に在籍。

## 黒田紀子 Noriko KURODA

武蔵野音楽大学卒業。ファゴットを境野達男、岡崎耕治、S.Azzolini、P.Marono各氏に、室内楽を山本正治氏に師事。現在はフリーのファゴット奏者として在京、地方のオーケストラ、吹奏楽、スタジオ収録などで活動中。

## ホルン

## 濱地 宗 Kaname HAMAJI

宮城県仙台市出身。東京藝術大学を首席で卒業。同大学院修了。在学中、安宅賞、アカンサス音楽賞受賞。第10回JEJU International Brass Competitionにて日本人ホルン奏者初となる国際コンクール優勝者となる。その他受賞多数。小澤征爾音楽塾、PMFなどに参加。神奈川フィルハーモニー管弦楽団首席奏者を経て、現在群馬交響楽団第一ホルン奏者。

## 井川雄太 Yuta IGAWA

北海道帯広柏葉高校、東京藝術大学卒業。ホルンを島方晴康、西條貴人、日高剛、伴野涼介、五十畑勉の各氏に師事。現在フリーランスとして活動中。

## 田島小春 Koharu TAJIMA

東京藝術大学卒業。須山芳博、守山光三、西條貴人の各氏に師事。現在、新日本フィルハーモニー交響楽団団員。

## 松田 知 Satoshi MATSUDA

国立音楽大学卒業。神奈川県立音楽堂のオーディションに合格し推薦演奏会に出演。草津国際音楽アカデミーを受講しチューデントコンサートに出演。オーケストラプレイヤーとして全国各地のオーケストラに客演している。これまでにホルンを近藤望、千葉馨、大阪泰久、ラルス・M・ストランスキーの各氏に師事。また室内楽を大橋幸夫、丸山盛三、北村源三の各氏に師事。現在(公財)千葉交響楽団ホルン奏者。

## トランペット

## 田中敏雄 Toshio TANAKA (首席)

1994年東京音楽大学卒業。トランペットを津堅直弘氏に師事。1992年にサンドポイント(米国)音楽院に参加し、室内楽をH.フィリップス氏、W.マルサリス氏の両氏に師事。在学中に関西フィルハーモニー管弦楽団に入団。現在、同団を経て読売日本交響楽団トランペット奏者、トウキョウモーツァルトプレイヤーズ、なぎさブラスゾリステン、Mostly Trumpet『THE MOST』メンバー。上野学園大学非常勤講師。

## 秋宗章太 Shota AKIMUNE

鹿児島県出身。9歳よりトランペットを始める。2001年福岡第一高等学校音楽科卒業。2005年東京藝術大学音楽学部卒業。関東を中心にフリーランスのトランペット奏者としてオーケストラでの演奏、トランペットの指導など様々な現場にて活動中。これまでにトランペットを山崎毅、杉木肇夫、井川明彦の各氏に師事。

## トロンボーン

## 奥村尚美 Hisami OKUMURA (首席)

国立音楽大学卒業。第39回下八川圭祐記念高知音楽コンクール第2位。第3回、第6回、クアルテットコンクールインジパング第4位。Trio AUBE、Brocade Brass Quintet、Trombone Quartet Bloom各メンバー。

## 山下 創 Hajime YAMASHITA

武蔵野音楽大学を卒業。これまでにトロンボーンを平田芳子、桑田晃の各氏に、室内楽を丸山勉氏に師事。現在はフリーランスのトロンボーン奏者として活動している。

## 出口真大 Mahiro DEGUCHI

昭和音楽大学大学院を修了。バストロンボーンを郡恭一郎、野々下興一の各氏に師事。桐朋学園大学嘱託演奏員を経て、現在は桐朋オーケストラ・アカデミーに在籍。

## チューバ

## 吉岡正洋 Masahiro YOSHIOKA

武蔵野音楽大学器楽学科を卒業。チューバを佐藤潔、室内楽を戸部 豊、ロジャー・ボボの各氏に師事。現在は演奏活動の傍ら、中高生の金管楽器指導にも携わる。

## パーカッション

## 小原由紀 Yuki OHARA

東京音楽大学付属高等学校を経て、同大学卒業。東京音楽大学教職課程管弦楽・吹奏楽指導助手。これまでに、菅原淳、野口力、藤本隆文、岡田真理子、藤本佳子の各氏に師事。